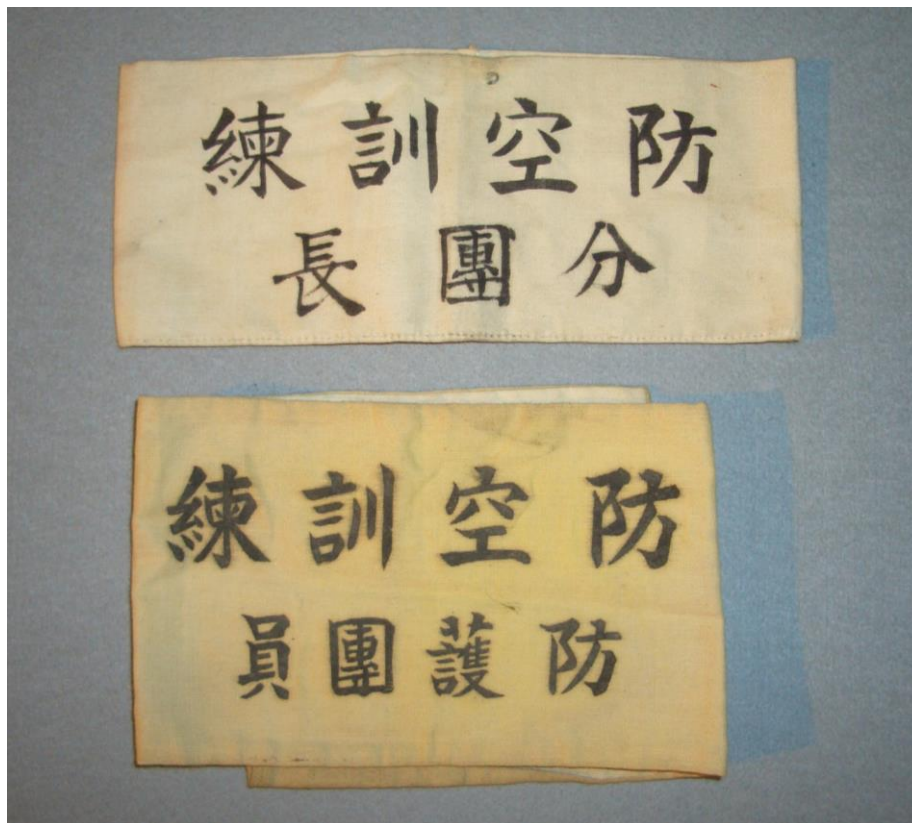


腕章から見える「防空」



この腕章は、戦前に空襲に備えて行なわれていた防空訓練(防空演習)で使われていたものです。

腕章に記されている「防護団」とは、防空活動のために全国各地で組織された団体です。飯能町では昭和 12(1937)年に当時の区(町内会)や在郷軍人会、青年団等の各種団体により組織されました。主に空襲時における警報の伝達や消火・救護活動の担い手であるとともに、空襲に備えた防空訓練にも取り組んでいました。戦時中の日常を描いたドラマなどで防空頭巾をかぶった女性たちがバケツリレーをしているシーンをしばしば見かけますが、まさにあのような光景が、かつて飯能でも繰り広げられていました。

空への備えとして結成された防護団ですが、それ以前から消防活動を担ってきた消防組(今の消防団)は別組織としてそのまま活動していました。そのため活動の重複などタテ割り組織にありがちな弊害が目立つようになりました。そこで昭和 14(1939)年に両組織は一本化され、消防と防空の双方を担う警防団が設置されました。

戦時下において防空活動は、「国民の義務」であり空襲時も逃げずに消火に当たることとされていました。しかし、米軍による空襲の威力はすさまじく、いかに訓練を重ねていたとしても、とてもバケツリレーや火たたき(竹竿の先に縄を付けハタキのようにした道具で火をたたいて消すのに使いました)で立ち向かえるレベルではありませんでした。それでも東京大空襲のような猛烈な大規模空襲においてさえも「義務」として市民による消火活動が行われ、その結果、逃げ遅れて命を失ってしまった方も多数いたそうです。